

創造農村とクリエイティブツーリズムに関する研究

— 丹波篠山市の挑戦 —

A Study of Creative Village and Creative Tourism
— Challenges of Tamba Sasayama City —

竹 谷 多賀子
TAKEYA Takako

＜目 次＞

- I. はじめに—先行研究と検討課題
- II. 歴史的建造物の保存・活用を起点にした文化観光まちづくり
- III. 一般社団法人ノオトと株式会社NOTEによる「創造農村」の推進
- IV. 丹波篠山市におけるクリエイティブツーリズムの試み
- V. おわりに—まとめに代えて

I. はじめに—先行研究と検討課題

本研究は、文化観光の一形態であるクリエイティブツーリズム（創造的観光）の実践において、その農村型の考察を通じて、日本におけるクリエイティブツーリズムの可能性と意義を明らかにするものである。

近年、ユネスコが推進する21世紀型の観光モデルとして、「クリエイティブツーリズム（創造的観光）」が注目を集めており、欧米をはじめ世界各地で急速に関心が広がっている。一方、日本においては、クラフト分野を対象とした、魅力ある金沢の観光モデルコースを世界に発信するための事業「金沢クリエイティブツーリズム」が2009年度から実施されている。クリエイティブツーリズムとは、2000年に、ニュージーランドの観光コンサルタントであるクリスピン・レイモンド（Crispin Raymond）と国連世界観光機関（UNWTO）のグレッグ・リチャーズ（Greg Richards）によって定義されたものである。また、2008年、ユネスコ創造都市ネットワークと米国ニューメキシコ州サンタフェ市共催による「第1回クリエイティブツーリズム国際会議」において、「本物のアート、文化遺産、特別な場所において参加型の学習を通じた本物の体験を得る観光」と定義されている（Wurzbürger, 2010）。そのうえで、グレッグ・リチャーズは、リチャード・フロリダ（Richard L. Florida）やアラン・スコット（Allen John Scott）のようなクリエイティブクラスやクリエイティブ産業の研究者は、「大都市だけがクリエイティブハブであると主張するが、これは旅行者が体験したいと思う日常の創造性が存在するすべての場所を無視している。工芸品や娯楽、芸術、音楽、そして文学にみられるように地元のライフスタイルに埋め込まれている日常の創造性によって多くの場所が形成され、グローバル化する世界において、場所を際立たせる一助となる創造性の側面の一つである。」と述べている。これらはクリスピン・レイモンドとグレッグ・リチャーズが最初に定義した「クリエイティブツーリズム」の元のコンセプトに影響を与えた創造性の視点であった（Greg Richards, 2021）。

一方、日本における創造都市論の第一人者である佐々木雅幸によれば「クリエイティブツーリズムとは、マスツーリズムの弊害を避け、地域固有の文化資源を生かした新しいタイプのツーリズムであり、ツーリストと地域住民とが感動や体験を共有することにより新たな価値を生み出し、地域の持続的発展に貢献するものである」と定義されている（佐々木, 2017）。

近年、観光の世界的な進展がもたらす環境破壊や伝統文化の破壊、オーバーツーリズムなどの観光公害に直面して、SDGsに向けた地域再生と持続可能な発展や社会問題解決をめざした観光への転換に期待が高まり、さらには2020年以降の新型コロナウイルス感染症拡大を背景として、クリエイティブツーリズムの取り組みは今後意義の大きいオルタナティブな観光の概念として重要性が高まっており、本研究はこれらの課題にこたえ、地域の事例分析を通じて、この点の解明を試みるものである。

分析の対象として、筆者はすでに、石川県金沢市を都市型クリエイティブツーリズムの対象として分析（竹谷，2021）を行っているが、本研究では、農村地域の典型として兵庫県丹波篠山市を取りあげる。

丹波篠山市に関する先行研究としては、川井田が、一般社団法人ノオトの活動を軸に創造農村の胎動を確認し、創造農村を実現するためにはノオトのような「漂泊的定住者」が重要であることを指摘した（川井田，2014年）。また、藤井、杉本は、2010年代の篠山市を事例に地方都市・地域社会の「成熟」の可能性を検討している（藤井、杉本，2015年）が、両者はクリエイティブツーリズムの観点では研究はなされていない。本研究は、これらの先行研究を踏まえつつ、日本におけるクリエイティブツーリズムの農村型の可能性と意義を明らかにし、新たな文化観光の在り方を検討する。

Ⅱ. 歴史的建造物の保存・活用を起点にした文化観光まちづくり

丹波篠山市は、古来より京都への交通の要衝として栄えた歴史が残る、城下町であり、宿場町であった。800年の歴史を持つ丹波焼をはじめとしたものづくりの文化、丹波黒大豆や丹波栗などの魅力あふれる農産物を有している。丹波篠山の歴史や産業、生物文化多様性を支えているのは、豊かな里山の自然であり、景観である。里山の中で自然と共に暮らしながら、たくさんの人との交流が生まれてきたこの土地では、伝統的な暮らしを守りながらも新しい考え方やものごとを取り入れる独特の風土が育まれている。本研究では、この丹波篠山の里山を舞台に、参加者と地域の人々が相互に交流し学びあう、創造的観光（クリエイティブツーリズム）の先駆的な取り組みを考察する。

丹波篠山市は、兵庫県中東部の中山間地に位置し、360度を山に囲まれた盆地である。その中心部に江戸時代初期に築城された篠山城があり、江戸時代を中心に形成された城下町の町割りが当時につくられたまま残っている。古くから京都への交通の要として栄えてきた歴史があり、美しい町並みや景観、伝統文化などに京都の影響が色濃く反映されている地域であり、篠山城跡を核とし、近世から近代にかけて建てられて武家屋敷や商家及び寺院などの町並みは、2004年に国の重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）に選定された。周辺にある宿場町と農村集落という二つの類型に分類できる福住地区の町並みは、2012年に2番目の重伝建地区に選定されている。

総面積377.6km²、豊かな山々に囲まれ、総面積の4分の3を森林が占めている自然環境豊かな農山村地域であるが、直線で50km圏内に京阪神（京都、大阪、神戸）があり、現代では電車や自動車ですぐと少しの距離に位置し、都市部からアクセスの良い地域でもある。人口は40,387人、世帯数17,528世帯（2021年度）、山々に囲まれた盆地気候であることから、年間を通じて昼夜間の寒暖差が大きく、その分、黒大豆をはじめ数々の特産物が美味しく育つ独自の気候性質を有する。

2015年に、クラフト&フォークアート分野で、ユネスコ創造都市ネットワーク（UCCN）¹⁾に認定され、加盟するとともに、文化庁が2015年に創設した「日本遺産」の第一期目にデカンショ節を要にしたストーリー「丹波篠山 デカンショ節—民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶—」が認定された。かつて城下町として栄えた丹波篠山の地は、江戸時代の民謡を起源とするデカンショ節によって、地域のその時代ごとの風土や人情、名所、名産品が歌い継がれており、地元の人々はこぞってこれを愛唱し、民謡の世界そのままにふるさとの景色を守り伝え、地域への愛着を育んできた。その流れは、今日においても、新たな歌詞を生み出し、新たな丹波篠山を更に後世に歌い継ぐ取組として脈々と生き続けており、今や400番にも上る「デカンショ節」を通じ、丹波篠山の町並みや伝統をそこかしこで体験できる世界が展開している²⁾。

さらに、2017年には「きつと恋する六古窯—日本生まれ日本育ちのやきもの産地—」として、六古窯（越前・瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前）の1つである丹波焼の産地として2つ目の日本遺産に選ばれた。

このように、丹波篠山市は近世の城下町で要衝であるが、生物文化多様性が豊かな環境に加え、質の高い農産物や生業を有するとともに、大都市圏から適当な距離があり、都市部である京阪神から約1時間の距離にありながら、都市化に走らず、乱開発の影響を受けなかったがゆえに、地域の固有価値が残されており、農村文化や伝統産業を守り続けてきた。そのなかで丹波篠山市は、農村風景や地域コミュニティ、日常の生活文化がもっている「創造性」に光をあてたまちづくり「創造農村」³⁾に取り組んでいる。

佐々木雅幸（2014）は、創造農村の定義について「コミュニティが持つ豊かな創造活動に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に地域に根ざした革新的で柔軟な経済システムを備え、ローカルな地域問題や、あるいはグローバルな環境問題の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ地域」と述べる。

この「創造農村」を目標に丹波篠山市が掲げるに至った経緯としては、2008年度、文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）受賞、丹波篠山築城400年祭を契機に、次の100年をいかに創造的なまちづくりを進めるのか検討が始まり、まちづくりの施策が始まったことにある。そのなかで、2010年に文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」に採択され、

表1 創造農村と丹波篠山市主なできごと

2004年	篠山重要伝統的建造物群保存地区（城下町）選定
2008年	文化庁長官表彰【文化芸術創造都市部門】受賞
2009年	丹波篠山築城400年祭・一般社団法人ノオト 設立 古民家の宿 集落丸山 開業
2010年	文化庁 文化芸術創造都市モデル事業採択
2011年	歴史文化基本構想 策定 天空農園 開業
2012年	第2回創造農村ワークショップ開催地 福住伝統的建造物群保存地区 選定
2013年	創造都市ネットワーク日本（CCNJ）に加盟 篠山市創造都市推進計画 策定 文化庁「文化芸術創造都市推進事業」受託事業者を一般社団法人ノオトが務める（～2017）
2014年	『創造農村 過疎をクリエイティブに生きる戦略』事例掲載 関西圏国家戦略特区事業開始（のちの篠山城下町ホテルNIPPONIA事業）
2015年	日本遺産認定（第1弾）ユネスコ創造都市ネットワークに日程（クラフト&フォークアーツ部門） 篠山城下町ホテルNIPPONIA 開業
2016年	株式会社NOTE 設立
2018年	福住宿場町ホテルNIPPONIA 開業
2020年	NIPPONIA 後川 天空農園 開業

出典 丹波篠山市HP、一般社団法人ノオトHPを基に筆者作成

2011年に歴史文化基本構想を策定するとともに、2012年、第2回創造農村ワークショップ（文化庁主催）が開催され、創造都市ネットワーク日本（CCNJ）⁴⁾ が立ち上がった際には、丹波篠山市は最初の幹事団体として手をあげ、全国のネットワークの中で意見交換に加わって活動し、実績をあげる中で、前述のとおり、2015年にユネスコ創造都市ネットワーククラフト&フォークアーツ部門に認定された。もとより「創造農村」としてユネスコ創造都市ネットワークに加盟したきっかけは「平成の合併」による財政危機であった。そこで、兵庫県職員の金野幸雄（のち、一般社団法人ノオト代表理事）が副市長として招かれることにより、地域の固有性や真正性、資源を再評価して、地域再生戦略として、ユネスコに加盟しようということになり、数々の実績を積み上げて認定に至ったのである。

そのうえで、2011年1月、神戸市で開催された「創造都市ネットワーク会議」にて一般社団法人ノオト（本拠地：丹波篠山市）より「創造農村」及び「モデル事業計画案」の資料が提出され、「創造農村篠山モデル」が提唱された。

このような状況の中で、丹波篠山市は都市化や工業化ではなく、景観や自然環境、農業や丹波焼など、農村の魅力を生かして地域を活性化し、未来につながる地域をめざしている。また、2011年には、「歴史文化基本構想」（文化庁）を策定し、さらに、2015年（平成27年）にSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）が国連で採択されたが、「それ以前から丹波篠山市では、「これからの100年のまちづくり」をどのように進めて行くか、市民とともに考え取り組んできた「創造農村」が、今となつては、まさしく丹波篠山市のSDGsの実現につながっている」と副市長の堀井宏之は述べる⁵⁾。

この創造農村とSDGsの一例としては、1、「みらいを創る人財づくり」（環境について自ら考える人になります。自ら考える人を育てます。）、2、「脱炭素社会の実現」（自らの消費が環境に与える負荷を考えられる人になります。）、3、「自然との共生」（人と生きものが共生できる環境をつくります。）、4、「環境に配慮した農業」（安全・安心な農作物をつくり。みんなであじわいます。）、5、「良好な生活環境・景観の創造」（森、里、川、海 環境のつながりを考えられる人になります。）を目標とした環境市民行動『丹波篠山SDGs』を掲げている。

Ⅲ. 一般社団法人ノオトと株式会社NOTEによる「創造農村」の推進

民間から「創造農村」に取り組む丹波篠山市の担い手としては、一般社団法人ノオトと株式会社NOTEをあげることができる。一般社団法人ノオトと株式会社NOTEの二つの組織があり、行政とともに車の両輪のように連携がはじまる。ノオトは、もともとは篠山市の第三セクターを統廃合して生まれた非営利法人であったが、自主事業を模索するなかで、空き家活用・古民家活用が大事なまちづくりの鍵になるところから事業が始まり、「集落丸山」をはじめ、篠山城下町内の町家の活用、近隣の市町村において市が所有する文化財の活用に取り組む中で、篠山や兵庫だけでなく、国の政策の流れに後押しされる形で全国にその仕組みを広げている。その土地にある固有価値や歴史、文化の多様性を活かして、一つひとつオーダーメイド型の事業をNIPPONIAプロジェクトとして展開しており、地域の「歴史建築」に宿泊し、地場の「食」を味わい、地域の「暮らし」を体感するツーリズム事業、または、まちづくり事業として取り組んでいる。

一般社団法人ノオトでは、公益事業として、政策提言や制度設計、調査研究を担い、株式会社NOTEでは、エリア開発事業の企画・計画策定、事業体組成、資金調達などゼロから事業の立ち上げ、継続的な運営にコミットするチームとして動いている。なお、地域の事業体・関連会社は、その地域の名士や若手のチームを組成し、北海道から沖縄まで全国二十数社ある。さらに、一般社団法人ノオトは、NIPPONIA協会の事務局を担当しており、ノオトだけでなく、NIPPONIA事業に関係する自治体や金融機関、民間事業者が関わって事業を進めていることから、NIPPONIA協会というコンソーシアムを組成し、情報交換や交流も行っている。

具体的にNIPPONIAの事業の考え方は、ノオトの前理事代表である金野を中心に「なつかしくて、あたらしい、日本の暮らしをつくる」を思想に掲げており、「本当の豊かさとは何か、豊かに生きる、豊かに暮らすとはどういうことかを考えたとき、日本の地域の昔ながらの暮らしの中にその豊かさがある」と考えている。そこを大切にしながら、これからの時代の日本の暮らしをつくることを思いにNIPPONIAの運動を広げていっている。さらにその考え方の解像度を上げると、「ローカルな価値といったものを続けていくために、何とか残して、価値があることを起点に、残すためにグローバルな事業で継承させる運動である。ローカルな思想とグローバルな思想、この二つを折り重ねている」と金野は述べる。このように、株式会社NOTEは、古民家活用を中心としたまちづくり事業を主に「NIPPONIA」事業を全国31地域に展開している。

日本の総人口は、2004年をピークに、今後100年間で100年前（明治時代後半）の水準に戻っていく。この変化は千年単位でみても類を見ない、極めて急激な変化である（国土交通省国土計画局）。ノオトで取り組む地域は、鎌倉時代から江戸時代にかけて集落として成立していた地域を歴史地区と呼んで事業を行っている。なぜかという、現在の社会において、切り捨てられようとしている地域は、上記に成立した地域ばかりである。金野は、「現代的な価値でいうと、不便であり、暮らしにくいと思われる地域である。そこが連綿と繋いできた文化を失わないためにも取り組まなければならない」と述べており、ノオトは純粋にこの地域の文化を何とかして残したいという思いで真摯に取り組んでいる⁶⁾。

海外と日本のいわゆる観光地の違いとしては、イタリアのボローニャをはじめ、ヨーロッパでは、「歴史地区」としての、伝統的町並みや地元住民の生活や暮らし文化の中に滞在するといった歴史地区観光が主であるのに対し、日本では、そのような考えが育ってこなかった。なぜかといえば、日本の観光地は、部分的に町の一角には趣のある町並みが残っているものの、開発が進み、まち全体としては面影が残っていない。つまり、観光地化と都市開発はほぼ同じものという考え方があったからである。そして、どんどん趣のある町並みが壊されていき、大量生産、大量消費型の観光事業として効率的に展開していくという観光産業が発展してきた。ただ、これからの観光地は、コロナウィルスの影響により、地方の本物の価値に目が向けられている。ヨーロッパに歴史文化が残る町並みを見に行くように、日本でも日本の暮らし文化を体験できる地方がまだまだ沢山ある。ノオトとNOTEは、そこに着目して事業展開を進めている。

たとえば、ノオトとNOTEは、「国内の歴史的建造物は、約149万件であるが、そのなかで国・行政に手厚く保存されているのは、約1.5万件にすぎない。つまり、残りの147.5万件は活用困っている状態である。まだまだ素敵なところに素敵な建物があり、それを使わない手はない」と考える。つまり、古民家をはじめとする歴史的建造物を活用することが地域再生のスイッチになるのではないかと、つながるのではないかと、ということに焦点を当ててきた。

一方、国の政策と流れも変わってきた。2016年、観光庁から「明日の日本を支える観光ビジョン」が出され、その中に「文化財を保存優先から観光客目線での理解促進、そして活用へ」という文言が謳われた。これは大きな潮目、潮流が変わるということで、ノオトらのこれまでの取り組みを国に伝える機会を得た。そのあとの、歴史的資源を活用した観光まちづくりタスクフォースの設立にあたり、金野が中心となり、政策提案や支援を行った。そのなかで「2020年までに全国200地域での歴史地区での観光まちづくりの取組を目指す」という流れが打ち出され、それを実現するための規制緩和や制度改革が行われるようになった。文化財保護法も保存だけでなく活用を重視した観点をより明確にするために、文化財保護法自体も2018年に改正され、2019年に施行された。いかに地域で指定文化財を含めて保存と活用を一体的に進めていくかという流れが打ち出されることになったことから、ノオトらの事業を後押しする仕組みができたといえる。

Ⅳ. 丹波篠山版クリエイティブツーリズムー「里山暮らし5日間～人とつながる旅」

以上のような創造農村の具体化や、国の政策の転換を受けて、丹波篠山市では、団体旅行を中心としたマストツーリズムや従来型の観光施設・観光資源を使用した団体集客型から脱皮し、「新しい形の観光旅行の形」として家族や少人数のマイクロツーリズムによる、自然・歴史・伝統・生業・生活文化など、日常の暮らしを観光資源とする「里山暮らし5日間

～人とつながる旅」を企画し、推進している。

具体的には2020年度の観光庁「誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成」実証事業を「明日の丹波篠山観光ビジョン会議」（丹波篠山市、丹波篠山市商工会、株式会社アクト篠山、丹波篠山観光協会、一般社団法人ウイズささやま、株式会社NOTE、一般社団法人ノオト）を組織して受託し、2021年度より、Masse丹波篠山（丹波篠山市商工会、株式会社アクト篠山、丹波篠山観光協会、一般社団法人ウイズささやま、株式会社NOTE、一般社団法人ノオト）を立ち上げて（図1）、社会実験的の事業を推進してきた。さらに、2021（令和3）年度からは、丹波篠山市がMasse丹波篠山の外側からアドバイザーとツアー支援を行う形で組織体制が整備されている。このMasse丹波篠山は任意団体であり法人化しているわけではないが、前述の一般社団法人ウイズささやまや株式会社NOTE、一般社団法人ノオト、丹波篠山観光協会、丹波篠山市商工会が横並びにまとまって組織化することで丹波篠山における観光のグランドデザインを描くことや、意志共有することを目指しており、現時点ではDMO化には至っていないが、将来的な法人化・組織化を目指している⁷⁾。さらに、当団体は丹波篠山市と連携しながら、市への誘客を促進するとともに関係人口及び移住の創出ならびに、先人から受け継がれてきた同市の自然、歴史、文化資産とその背景にある農産品、建築、陶芸、商いなどの「暮らしに結びついた産業」を次世代に継承していくことを目的とし、組織横断的な活動に取り組んでいる⁸⁾。

この「里山暮らし5日間～人とつながる旅」では、「体験する」「学習する」「交流する」という3要素を重視しており、

- ① 参加者に「観光旅行」を通して地元の暮らしを学び、体験を通して自分なりに何かを持ち帰ってもらう。
- ② 「体験型の観光コンテンツ」を通して、これからの「暮らしのヒント」をみつけてもらう。
- ③ 地域の人と交流し、つながることで、将来的な移住候補者としてのコンタクトリストづくりにも繋げてもらう。

以上のように、3点のコンセプトをまとめた上で、「その土地に暮らす」ことを追体験させてくれる宿泊施設の整備について、以下の5点を挙げているが、いずれも良く練られた指針となっている。

- ① ホテルとも旅館とも違う、地域の暮らしや歴史に溶け込む宿泊施設。
- ② 江戸時代に栄えた古い商家や旅籠を改装した城下町の宿。
- ③ 茅葺の屋根が特徴的な農村地域の古民家宿。
- ④ 何代かの人の手を渡りながら、城下町や集落にとけ込み、人と建物が一緒に生きてきた古い家。

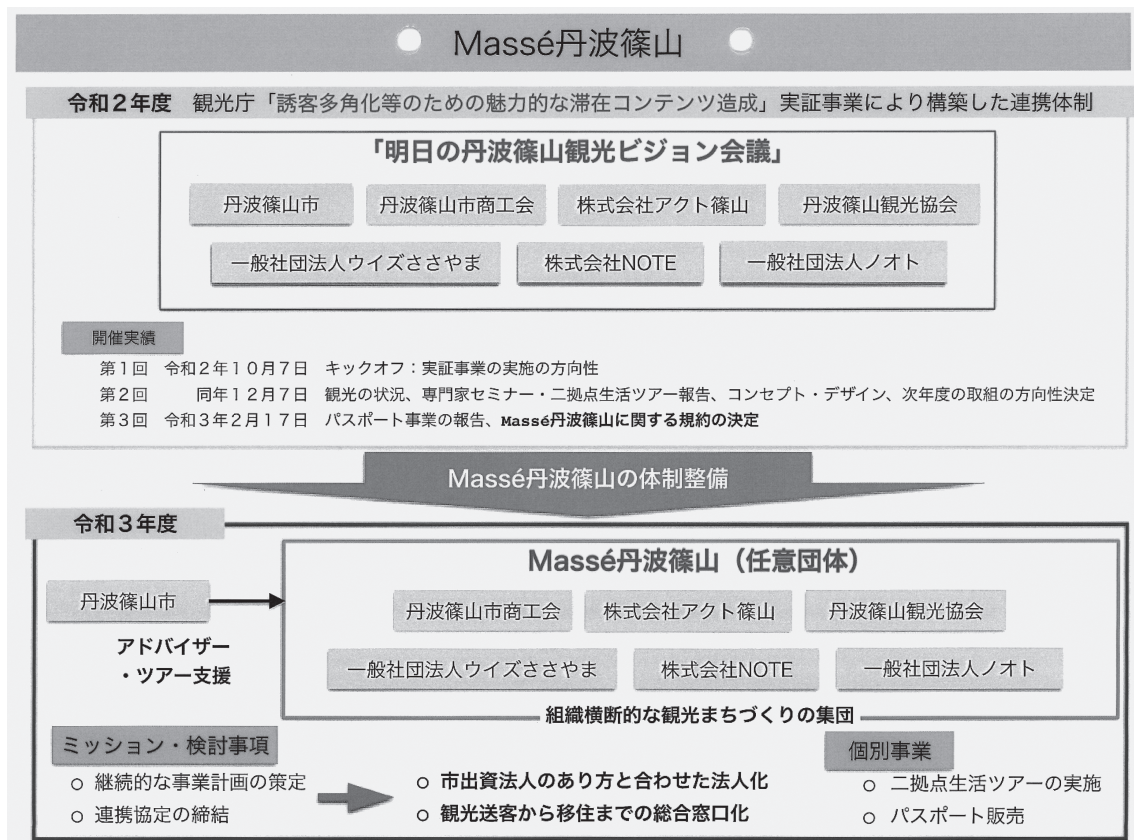


図1 丹波篠山市におけるクリエイティブツーリズムの実施体制

出所 丹波篠山市・ウイズささやまより提供

- ⑤ 少し不便さを感じても、天井や柱、間口や瓦屋根、ふとした瞬間に家そのものが持っているくらしの豊かさを感じさせてくれる。

ここには、地元で取り組まれた古民家保存活用事業による実績と成果が反映されており、丹波篠山の固有価値ともいえるものとなっている。

その上で、人との交流を軸とした「体験型のプログラム」として

- ① 「農業体験」里山暮らしの風景・文化・産業を支えている農業を体験する
- ② 「仕事体験」地域にある様々な仕事を体験し、生活の手段、暮らし方を知る
- ③ 「移住者訪問」里山で起きている移住者による新しいライフスタイルの訪問、インタビューを通して地域の人と交流する
- ④ 「料理体験」料理を通して、地域の風土や特産物の使い方を学ぶ
- ⑤ 「陶芸体験」今田・立杭の訪問と丹波焼の作陶体験を通して、伝統工芸に触れる
- ⑥ 「歴史施設訪問」篠山城址など、城下町の歴史施設を訪問し、歴史を学ぶ
- ⑦ 「伝統を知る」地域に根付く「伝統」に触れ、生活の中にある文化を学ぶ
- ⑧ 「里山の保全・管理」里山の環境整備と保全活動を見学し、学習する

以上の8点を例示しており、「5日間の里山暮らしの体験メニュー」として充実させようとしている。

そのうえで、実際のプランは、2021年度では、表2のように、「城下町プラン」と「農村プラン」の二つが用意され、2022年度では、それらを統合する形で（表3）、テーマを「“地域イノベーション”丹波篠山のまちづくり・地域づくりの活動を学ぶ」と掲げ、地域ならではの生業を軸に起業している人々の話を聞く体験プログラムがメインコンテンツとしているほか、地域固有の文化資源を体験する仕様となっている。具体的には、参加メンバーの顔合わせの後、市内の文化資源である篠山城跡と歴史施設を散策した後、株式会社NOTEにて、代表取締役の藤原岳史より自身の起業までの話やNIPPONIAの取組などの講演を聞くほか、国の伝統的建造物群保存地区にも認定された福住地区においては、株式会社LOCAL PR Plan安達鷹矢より、SHUKUBA オフィスでの話を通して、福住地域のエリアマネジメントの取組に関する現場歩きや講演を聞く。さらに、村雲エリアにある加古勝己の工房にて、「工芸を通したまちづくり」であるクラフトヴィレッジの取組などの話や、吉良農園では、有機農業の畑にて実際の農業の様子や山の整備の現場を見学することに加え、座学を受けるなど、丹波篠山市における創造的な人材との交流や郷土料理づくり、陶芸体験などの創造的な活動を通して、地域住民と参加者同士が刺激やアイデアを見いだすようなツアーとなっている。

事業の2021年度の実績報告書によれば、令和3年11月、12月に開催され、参加費は30,000円で、参加者はそれぞれ、9名と14名となっており、地域別では兵庫県が46%、東京都が27%、大阪府と和歌山県と奈良県が9%となっており、東京都が2番目に多いのが特徴的である。年代では40代が38%、30代と50代が19%、20代が14%、10代と70代が5%となっており、意外に若い世代が多く、若年移住の候補者になっているのであろう。実際に、二組の移住者が生まれるという成果を上げている。広報媒体ではFacebookが33%、市内にある、暮らし案内所が19%、ウイズささやまHPが14%で、

表2 2021年度ツアー詳細日程（4泊5日間）

＜2021年度丹波篠山里山暮らしツアー・城下町プラン：江戸の風情が薫る城下町で過ごすプラン＞

1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
- メンバー顔合わせ - 篠山城跡 - 歴史施設の散策	- 城下町のショップ訪問（雑貨屋、カフェ、お宿、会社オフィス等） - 城下町での仕事体験	- 終日、丹波焼の郷今田エリアの訪問 「丹波焼」の陶芸体験等	- 郷土料理とともにツアー交流会 - 里山の保全活動を見学	- 丹波篠山の食材を生かした料理体験 - 黒豆を使ったレシピ等

＜2021年度丹波篠山里山暮らしツアー・農村プラン：豊かな自然と心安らぐ農村で過ごすプラン＞

1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
- メンバー顔合わせ - 篠山城跡 - 歴史施設の散策	- 農村にてショップ訪問（時計工房、ギャラリー、パン屋、カフェ等） - 農村地域での仕事体験	- 朝少し早めから農家さんの収穫体験等をお手伝い - 採れたての食材でお昼ごはん - 農村部にある工房見学、滝遊び等	- 郷土料理とともにツアー交流会 - 里山の保全活動を見学	- 丹波篠山の食材を生かした料理体験 - 黒豆を使ったレシピ等

出所 「令和3年度丹波篠山里山暮らし報告書」をもとに筆者作成

表3 2022年度ツアー詳細日程（4泊5日間）
＜2022年度丹波篠山里山暮らしツアー＞

1日目	- メンバー顔合わせ - 篠山城跡 - 歴史4施設の散策 - NOTE社 藤原岳史氏 (NIPPONIAの取組を通して古民家再生による地域創生を目指す) - 古民家ゲストハウスやまぼうし、農家民宿DEN、田舎民宿うめたんFUJI、森の風土、古民家ゲストハウスやなぎ、田舎民宿山鳥庵に各宿泊（以下同様）
2日目	- 福住の街歩き - Local PR plan 安達鷹矢氏 (宿場町だった町・福住にて「ITとクラフトアートで外貨を稼げる田舎まち」を掲げ、地域コーディネートに取り組む) - 陶芸家 加勝己氏 (陶芸、木工、ガラス、染色、革工芸、彫金、竹工芸など丹波篠山に集う数多くのものづくり作家たちをつなぐ地域づくりの活動として、「丹波篠山クラフトヴィレッジ」⁹⁾を主催。作り手と使い手が出会い、つながり、工芸をもっと身近に感じてもらうために取組む) - 参加者懇親会（ジビエなどの郷土料理）、文化体験（デカンショ節の実演）
3日目	- 吉良農園 吉良佳晃氏 (古市地区にて、家族で農業を経営。約1haの農場で年間50品種ほどの野菜やハーブ等を栽培。野菜に対する独特の価値観で、新たな商品を提案し続け、レストランのシェフ等と関係を築いている。「100年後も続く里山モデル」を確立することをテーマに、里山資源を利用して新たな循環を創るプロジェクトにも取組む) - 今田・立杭にて路地歩き、丹波焼の陶芸体験（希望者のみ）
4日目	8月八上城登山、11月雲海ツアー（希望者のみ） 8月郷土料理体験 いずみ会、11月 農業体験 黒枝豆の収穫体験
5日目	- 里山工房くもべにてツアーの振り返り - 市内からの市議会議員や丹波篠山市、観光協会、ウイズささやまのメンバーと交流

出所 「令和4年度丹波篠山里山暮らし報告書」をもとに筆者作成

InstagramとNIPPONIAとぐるり丹波篠山とヒトタビHYOGOが5%となっている。

さらに、2022年度の実績報告書によれば、令和4年8月、11月に開催され、参加費は49,500円（学生は29,700円）で、参加者はそれぞれ、8組11名と6組10名となっており、地域別では、兵庫県（33%）、大阪（28%）、東京（17%）の順で、海外［米国］（11%）からの参加者が加わったことも特徴的である。年代では、50代が38%、40代が24%、20代が19%、10代以下が14%となっている。また、本ツアーを企画・運営した一般社団法人ウイズささやまの生野雅一によると、参加者の平均消費額は人それぞれというところで判断しかねるが、概算で、宿泊費の平均8,000円×4泊×10名×各2回＝640,000円、食費の平均2,500円×10回×10名×各2回＝500,000円、体験コンテンツ消費額の平均20,000円×10名×各2回＝400,000円、お土産購入額の平均5,000円～10,000円×10名×2回＝100,000円～200,000円を確認している。さらに、令和3年、4年の2年間で延べ40名ほどの参加者がおり、そのうち7組12名が、その後の丹波篠山への移住に繋がっている。総務省のデータにおいて、定住人口が年間消費する額が124万円という数字があることから、124万円×12名分＝1,488万円も、同ツアーがもたらした地域への還元額とみなすことが出来るかもしれないと述べている¹⁰⁾。

このような結果を踏まえ、参加者からの声¹¹⁾を確認したところ、「丹波篠山の魅力が詰まった素敵なツアーだった。普通の観光では体験できないことが多く、楽しみと同時に学びになった」「出会う人々が丹波篠山を好きなことが伝わり、町にも人にも活力を感じた」「ツアーを通じて、観光では知ることのできない「地域の暮らし」を体感することができ、そしてこれからの自分の暮らし方についても考える良い機会となった」「個人の観光では訪れると会うことのできない移住者や現地の方の話を数多く聞くことができたところが良かった」「地域の方とのふれあい、町ではできない体験、スタッフの皆さんや参加者の皆さんとの関わりなど、本当に期待以上のものだった」「丹波篠山は、一人一人のプレイヤーが個性豊かで面白くて住んで飽きない町だと思った」「風景、特産品、工芸、伝統、とコンテンツが多く、多様な楽しみ方ができる。これもまた飽きない＆多様な人を惹きつける町だと思う」「都会にはない暮らし方に今改めて魅力を感じた」「丹波篠山には自然と伝統が多く残され、地の人、移住者、行政も一丸となって守ろうとしている姿勢を感じた」などの好意的な感想があった。このように参加者は地域住民との対話・交流により、感動や体験を共有し、新たなライフスタイルや暮らし方などの価値を見いだす機会となっていることが見てとれる。

こうしたクリエイティブツーリズムの流れが加速化したのは、ユネスコ創造都市ネットワークの取り組みが支えにある。前述のように丹波篠山市は2015（平成27）年に、クラフト＆フォークアート分野で、ユネスコ創造都市ネットワークに認定されたが、同じクラフト＆フォークアートの分野における日本の認定都市としては金沢市が先んじて2009年に認定され

ており、同年にクリエイティブツーリズムを実施している。金沢市は、2008年に「世界創造都市フォーラムin Kanazawa」を開催し、既にユネスコ創造都市ネットワークのクラフト&フォークアート分野で認定登録を受けた米国サンタフェ市より副市長（文化担当）のレベッカ・ワーズバーガー（Rebecca Warzburger）を招き、日本で初めてクリエイティブツーリズムが紹介された。そこで金沢版クリエイティブツーリズムのヒントを得るとともに、この翌年、金沢市は世界工芸都市・金沢の技の粋に触れる「クラフトツーリズム」（クリエイティブツーリズムのモデル事業）を展開することとなる。このようにユネスコ創造都市ネットワークのクラフト&フォークアートの分野でクリエイティブツーリズムを進める都市の事例を丹波篠山市は参考にし、「里山暮らし」「クリエイティブ暮らし」をテーマにクリエイティブツーリズムとして展開するに至った。

そのうえで重要なのは、この「丹波篠山里山暮らしツアー」を企画・造成した一般社団法人ウイズささやまの生野や理事の田林信哉などの存在が大きいことである。生野は大学で文化人類学を専攻し、大学卒業後、アフリカ専門の国内の旅行会社に就職。その後、ケニアの旅行会社で日本人旅行者の受け入れや、行政関係者などのコーディネータを務め、帰国後、前述の旅行会社に戻るが、コロナ禍の中、初めて丹波篠山に訪れファンになり、2020年の「お試し移住ツアー」への参加を機に、ウイズささやまの旅行業立ち上げの人材募集を聞き応募し、2021年に入社に至る。また、田林は、和歌山県生まれで2005年に総務省入省後、地方行財政制度の企画立案に従事。内閣府への出向や、地方自治体では山口県庁や下関市役所での勤務を経験。直近では、2016年～2017年に福島県南相馬市副市長として原発被災地からの復興に従事。2020年総務省を退職し、同年2月株式会社NOTEに入社し、歴史的資源（古民家等）を活用したエリアマネジメント、観光まちづくりを経験。本年4月、フリーランスで民間・行政事業構築支援、公民連携コーディネート活動を開始するとともに、ウイズささやまの理事を務める。このように、新たな移住者がこれまでの経験を活かす形で、ツアーを企画・運営し、大きな貢献をする。この貢献を通じて、丹波篠山におけるクリエイティブツーリズムの実践が行われているのである。

今後、生野は、大人を対象とした地域の暮らしから学ぶスタディツアー的な内容として、7月と10月と12月の年3回開催を予定しており、日程を短縮して2泊3日とし、持続的になるとの見通しが生まれている。また、2022年度からウイズささやまが中心となって取組む「里山アカデミー」では、高校生や大学生をターゲットに、丹波篠山における里山の暮らしを支える第1次産業のあり方、農業や林業を通して先進的な取り組みをしている事業者の活動によりコミットして、これからの地方農村部の暮らしのあり方、現在進行形で取り組んでいる若手の事業者から学ぶような内容を行っている。この「里山アカデミー」では、若い年代が対象ということから、もう少しツアーの中身にエンターテインメント性を持たせ、イメージとしては欧米の学生が参加するようなサマーキャンプの日本・里山版を企画している¹²⁾。また、田林は、Satoyakubaの代表として、2023年度の4月と5月に、丹波立杭を舞台に、「クラフト」と「食」をテーマに少人数の窯元交流ツアーを開催する。ここでは、「陶工と出会い、土を採り、作陶を通して、丹波焼の成り立ち、窯元の営み奥深くに触れる」とともに、「最古の登窯が建つ丘にテーブルセット、新緑の景色の中で、陶工と食卓を囲んで、地元フレンチシェフの料理を味わうダイニングアウト」を開催し、「こうした体験を、産地を担ってきた窯元のコミュニティと交流する時間と合わせて楽しんでほしい」という¹³⁾。

丹波篠山市はこの十数年間で着実に進化し、現在は次のフェーズに入口にあり、伝統の焼き物の産地の中で全く新しい動きが出てきた。この町の人々が工芸を大切にしており、そこに移住者が集まってきている。これは行政の応援で、文化遺産が文化資本に変わってきたことを意味している。「クリエイティブ暮らし」は新しいというよりは、むしろゆったりとした日常の暮らしの体験であり、どれだけ質の高い体験や経験を準備できるかが重要である。また経済価値だけでなく、移住者を増やすためには「里山暮らしツアー」は強力な武器になる。現在はテストマーケティングを行って結果が出てきており、行政はこれを着実に育てるのが望ましいといえる。一方、日本の創造都市や創造農村をネットワーク束ねる創造都市ネットワーク日本では、ユネスコ創造都市との連携を深める国際ネットワーク部会と、創造農村部会を立ち上げる。丹波篠山市がリードしてグローバルとローカル、この両輪で閉塞状況にある日本をクリエイティブに変えてほしいと願っている。

V. おわりに—まとめに代えて

本研究では、丹波篠山市がクリエイティブツーリズムに取り組む経緯を概観した上で、日本におけるクリエイティブツーリズムの農村型の可能性と意義を明らかにする目的で分析を試みた。

表4 農村型クリエイティブツーリズムの特徴と意義

実施体制（担い手）	行政と民間による公民連携
地域の目指す姿	創造農村
地域の発展の形	内発型発展
創造性の源泉	クリエイティブな暮らし・創造的人材・ネットワーク
形態	ツーリズム系
もたらす効果	地域の持続性や文化的価値の向上，交流人口・関係人口・移住者の増加
期待される政策	地方創生，観光・移住政策

筆者作成

実地調査の結果から、農村型クリエイティブツーリズムの特徴として、

第一に、営利性は低いが、マスツーリズムから脱却した新たなツーリズムの形である。これを支えるためには行政の理解と推進役（事業主体）が必要である。丹波篠山市の場合は、行政の理解と協力体制が取られていることで、クリエイティブツーリズムの活動の起点になったといえるだろう。

第二に、地域の固有価値を有する自然や歴史、文化資源を生成する環境と住民が主体となって、その地域の自然や文化を守りつつ合理的に活用しながら取り組む内発型発展地域であり、クリエイティブツーリズムの実践により、それらの文化的・社会的価値を一層高めていること。

第三に、クリエイティブツーリズムは、日常の暮らしの中の創造活動に基づいており、学びの体験などを通じて新しいアイデアや価値観を生み出すような創造性を発揮する場や創造的人材からなるネットワークの多様性が鍵となる。

第四に、経済効果をもたらす、地域の持続性に寄与するものである¹⁴⁾。

第五に、創造農村の取組がなされる中で、期待される政策（地域創生、観光政策、移住政策、文化政策等）とセットで推進していくことが求められる。

日本におけるクリエイティブツーリズムの可能性は、都市型と農村型の二つの事例から発揮すると考えられるか、更なる検証が必要である。今後、考えられるクリエイティブツーリズムの端緒としては、創造都市や創造農村の取組に観光を結び付け、実践する京都、岡山、北海道東川、熊本県多良木などは発展の可能性がある。特に、都市化が進んでいない地方や農村においては、まだまだ多くの魅力や多様な観光資源を秘めており、それらを掘り起すうえでも発展の可能性があり得るといえよう。

謝辞

本研究を進めるにあたり、丹波篠山市、一般社団法人ウイズささやま、一般社団法人ノオト、株式会社NOTE、Satoyakubaの皆さまをはじめ、関係者の皆さまに多大な御協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

「注」

- 1) ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は、文化の多様性を保持するとともに、世界各地の文化産業が潜在的に有している可能性を都市間の戦略的連携により最大限に発揮させるための枠組みとして、2004年より「ユネスコ創造都市ネットワーク（UCCN）」事業を開始し、7つの分野で創造都市を認定、相互の交流を推し進めている。7つの分野：文学・映画・音楽・クラフト&フォークアート・デザイン・メディアアート・ガストロノミー
- 2) 丹波篠山市公式観光サイト「ぐるり！丹波篠山」より
<https://tourism.sasayama.jp/japanheritage/>（最終閲覧日2023年3月27日）
- 3) 「創造農村」という言葉は、2011年に第1回創造農村ワークショップ（文化庁、創造都市ネットワーク主催）を開催するに先立って、木曽町の田中勝己元町長から提言を受けたことに由来する。つまり、創造都市論を踏まえた場合、創造都市の理念の一つである「文化が持つ創造性を包摂的な社会づくりに生かす」という点については、都市部・農村部にかかわらず、理念は同じだとされている。ただ「都市」という言葉が持つニュアンスに当てはまらない地域は日本全国に少なくない。そこで、「都市と農村のそれぞれの個性と特徴」を意識し、農村ならではの取組の形があるという仮説を立てるところから「創造農村」が始まった。

- 4) 創造都市ネットワーク日本（CCNJ）は、創造都市の取組を推進する（または推進しようとする）地方自治体等、多様な主体を支援するとともに、国内及び世界の創造都市間の連携・交流を促進するためのプラットフォームとして、わが国における創造都市の普及・発展を図ることを目的として、2013年1月13日に設立された。
- 5) 2022年「令和4年度創造都市セミナーin北九州—創造農村がSDGsを実現する」での堀井宏之副市長の発表より
- 6) 2020年度同志社大学「クリエイティブジャパン科目」での金野幸雄氏の発表より
- 7) 一般社団法人ウイズささやまの聞き取りより
- 8) 一般社団法人ノオトホームページより
https://team.nipponia.or.jp/news_release/2161/（最終閲覧日2023年3月27日）
- 9) 丹波篠山には、陶芸、木工、ガラス、染色、革工芸、彫金、竹工芸など丹波篠山には数多くのものづくりの工房がある。「丹波篠山クラフトヴィレッジ」は作り手と使い手が出会い、つながり、工芸をもっと身近に感じてもらうための企画であり、丹波篠山市におけるクリエイティブツーリズムの要素の一つであるといえる。
<https://kisspress.jp/articles/37533/>（最終閲覧日2023年3月27日）
- 10) 一般社団法人ウイズささやま生野雅一氏の聞き取りより。ただし、移住者に関しては、各々すでに検討していたようなところもあるので、必ずしもこのツアーへの参加が決め手というわけではない。
- 11) 「令和3年度丹波篠山里山暮らし報告書」「令和4年度丹波篠山里山暮らし報告書」をもとに一部要約
- 12) 一般社団法人ウイズささやま生野雅一氏の聞き取りより
- 13) Satoyakuba 田林信哉氏の聞き取りより
- 14) もとより文化観光とは、有形又は無形の文化的所産その他の文化に関する資源の観覧、文化資源に関する体験活動その他の活動を通じて、文化についての理解を深めることを目的とする観光をいう（文化観光推進法第2条）が、この一形態であるクリエイティブツーリズムの活動は、たとえば、「丹波篠山クラフトヴィレッジ」（代表：加古勝己〔京都市から移住〕（表3）の事例からも、農村文化という地域の固有価値に惹きつけられたクリエイターが集い、移住することにより、伝統的なものづくりを創造産業へ変えようとし、地域の持続的発展の動きがみられる。

〔参考文献〕

1. 池上惇（2012）『文化と固有のまちづくり』水曜社
2. 梅棹忠夫（1967）『文明の生態史観』中央公論社
3. 大橋昭一（2017）「サステイナブル・ツーリズム原理論の展開過程—サステイナブル・ツーリズムの可能性を求めて」
4. 大橋昭一（2018）「『貧困克服』のためのサステイナブル・ツーリズム論—プロパアツーリズム論の進展」
5. 北川フラム（2014）『美術は地域をひらく』現代企画室
6. 佐々木雅幸（2001/2012）『創造都市への挑戦—産業と文化の息づく街へ』岩波書店
7. 佐々木雅幸（1997）『創造都市の経済学』勁草書房
8. 佐々木雅幸「クリエイティブ・ツーリズムの成立条件と創造都市連携の可能性」科研費基盤研究成果報告書，2017
9. 佐々木雅幸「文化多様性と社会包摂に向かう創造都市」佐々木雅幸・水内俊雄編『創造都市と社会包摂』水曜社，2009
10. 佐々木雅幸，竹谷多賀子「創造都市ネットワークの展開とその可能性」同志社大学経済学会『経済学論叢』，2018
11. 敷田麻実，湯本貴和，森重昌之編（2020）『はじめて学ぶ生物文化多様性』講談社
12. Throsby,D.,Economics and Culture.Cambridge University Press,2001,中谷武雄・後藤和子監訳『文化経済学会入門—創造性の探求から創造再生まで』日本経済新聞社，2014
13. 竹谷多賀子（2019）「創造農村と維持可能な社会の実現」，佐々木雅幸，敷田麻実，川井田祥子，萩原雅也編『創造社会の都市と農村』水曜社
14. 竹谷多賀子「創造都市とクリエイティブツーリズム—金沢における文化の多様性と持続性の視点から—」『日本都市学会年報』54，2021
15. 竹谷多賀子「クリエイティブツーリズムによる過疎地域の持続的発展—珠洲市におけるアートツーリズムの可能性—」『金沢星稜大学論集』56(1)，2022
16. 丹波篠山市「令和4年度創造都市セミナーin北九州—創造農村がSDGsを実現する」発表資料，2023
17. 鶴見和子（1989）「内発的発展論の系譜」，鶴見和子，川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会
18. 藤田直哉編（2016）『地域アート美学／制度／日本』堀内出版
19. 文化経済学会＜日本＞編（2016）「文化経済学 奇跡と展望」ミネルヴァ書房
20. 一般社団法人Masse 丹波篠山「令和3年度丹波篠山市・観光事業推進事業 里山暮らし5日間～地域イノベーションの最前線実績報告書」，2022
21. 一般社団法人Masse 丹波篠山「令和4年度丹波篠山市・観光事業推進事業 里山暮らし5日間～地域イノベーションの最前線実績報告書」，2023
22. 真子和田「持続可能な観光をめぐる政策動向—コロナ時代の観光を見据えて—」国立国会図書館調査及び立法考査局，調査と情報，第1110号，2020
23. 宮本憲一（2006）『維持可能な社会に向かって』岩波書店

24. 宮本憲一（1998）「農村と都市の共生を求めて」, 宮本憲一, 遠藤宏一編『地域経営と内発的發展—農村と都市の共生をもとめて—』農山漁村文化協会
25. 藤井和佐, 杉本久未子（2015）『成熟地方都市の形成—丹波篠山にみる「地域力」』福村出版
26. 藤原岳史（2022）『NIPPONIA 地域再生ビジネス』プレジデント社
27. Ankei,Y., 2002, “Community-based Conservation of Biocultural Diversity and the Role of Researchers :Examples from Iriomote and Yaku Island,Japan and Kakamega Forest,West Kenya.Yamaguchi Prefectural University“ ,Bulletinof the Graduate schools3:pp13-23.
28. Anita Kangas et al eds, 2020, “Cultural Policies for Sustainable Development, Routledge
29. Benhamou,F .and Peltier,S., 2007,”How Should Cultural Diversity Be Measured ? An Application Using the French Publishing Industry”,31 J Cult.Econ.85.
30. Crispin Raymond ,2013,“What’s in a Name? The Origins of The Term “Creative Tourism”,In Creative Tourism-A Global Conversation ,edited by Rebecca Wurzburger , The City of Santa Fe:Sunstone Press
31. Elena Paschinger,2015,THE CREATIVE TRAVELER’S HANDBOOK ,UK:Full Flight Press
32. Greg Richards,2013,Creative Tourism and Local Development , In Creative Tourism-A Global Conversation ,edited by Rebecca Wurzburger , The City of Santa Fe:Sunstone Press
33. Kathleen Scherf, 2021,Creative Tourism in Smaller Communities ,University of Calgary
34. Melanie K. Smith & Mike Robinson ed, 2006, Cultural Tourism in a Changing World — Politics, Participation and (Re) presentation, Clevedon , Buffalo, Toronto : Channel View Publications
35. Melanie K. Smith & Mike Robinson ed,阿曾村邦昭・阿曾村智子訳「文化観光論—理論と事例研究—古今書院, 2009
36. M. Robinson & David Picard,2006, Tourism, Culture and Sustainable Development, UNESCO Cultural Tourism Division, Paris, UNESCO
37. Nancy Duxbury, 2020,A Research Agenda for Creative Tourism,Glos:Edward Elgar
38. Nancy Duxbury ,2021, Cultural Sustainability ,Tourism and Development, Routledge
39. OECD,2014,Tourism and the Creative Economy,Paris:OECD
40. Rebecca Wurzburger,2010,CREATIVE TOURISM A Global Conversation, The City of Santa Fe :The City of Santa Fe
41. Suzan Carson and Mark Pennings, 2019, Performing Cultural Tourism, Routledge
42. Paula Remoaldo ,Jiliana Alves and Vitor Ribeiro,2022,Creative Tourism and Sustainable Territories,Emerald Publishing
43. ウィズささやま <https://withsasayama.jp/>（2023年3月26日最終閲覧）
44. 太下義之「クリエイティブ・ツーリズムによる地域振興」三菱UFJ リサーチ & コンサルティング, 2009
https://www.murc.jp/report/rc/column/search_now/sn090501/（2020年9月26日最終閲覧）
45. 丹波篠山市 <https://www.city.tambasayama.lg.jp/>（2023年3月30日最終閲覧）
46. 一般社団法人ノオト
<https://team.nipponia.or.jp/note-institute/>（2023年3月29日最終閲覧）
47. Brent Haniffa,2015,What is the economic value of Creative Tourism in Santa Fe, New Mexico?
<https://core.ac.uk/download/pdf/36693356.pdf>（2023年2月12日最終閲覧）

